

「安澤秀一先生のお話をうかがう会」

記 録

日 時： 2010年4月10日 14:00 - 17:00
会 場： 安澤秀一先生ご自宅（調布市）
参 加 者： 毛塚万里、住広昭子、田窪直規、田良島 哲、筒井弥生、
（50音順） 富澤洋子、中村節子、水谷長志、梁瀬三千代、若月憲夫

起稿・編集・校閲：毛塚万里、筒井弥生、水谷長志

主な参考図書：

- 『芝区誌』東京市芝区役所 1938
- 『史料館の歩み四十年』国文学研究資料館史料館 1991
- 『国文学研究資料館の20年』国文学研究資料館 1992
- 『日本の文書館運動 全史料協の20年』全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編 岩田書院 1996

本稿は標記の会合のお話を録音し、文字起こしするとともに若干の注および先生の補記を加えた記録である。当日は14時に先生宅を訪問し、書斎、書庫を見学の後、ギャラリーを兼ねる別宅広間にて、およそ2時間半ほど先生からのお話をうかがった。

当日の司会進行は水谷がつとめたが、随時、参加者からの質問が入るなど、フランクに進められた。

水谷 ぼちぼちお話を伺っていきたいと思います。（インタビュー用に先生の略歴が記された紙を見ながら）お生まれは1926年、昭和元年ですね？

安澤 大正です。12月2日生まれ。昭和は12月26日からだから。

水谷 芝区というと...

安澤 愛宕町（あたごちょう）、今の愛宕山の下。育った家は、愛宕山の北側にありましたね。ぼくがまだよちよち歩きのとくに、うちから出てすぐ石段上がっていきと、どうやって上ったかわからないんだけど、そこに自動車道路（当時の放送局、今は放送博物館¹へ行く道、そして愛宕神社があった）があつてね。そこにあがつていって自動車の下敷きになっちゃった、という話を

¹ NHK 放送博物館 <http://www.nhk.or.jp/museum/index.html>

聞いています。

(余談 - 遊び場の記憶、田村町交差点の近くに飛行館²という博物館施設があり、遊び場の一つでした。またその先の日比谷公園などでも楽しく遊んでいました。また西久保巴町という市電停留場の北側坂道をあがっていくと、エキゾチックな外観の大倉集古館³があり、子供心に焼きついた。西には琴平金毘羅宮⁴、田村町の南は新橋駅であり、そのそばの烏森神社⁵など遊び場にことかかなかった。神谷町には菩提寺である真宗梅上山光明寺⁶があり、その墓地のうしろにオランダ大使館⁷がある。もっとも祖父は長州萩で世襲の真宗玄德寺⁸住持をしていたが、還俗して旧姓安澤にもどった。その縁で光明寺に葬られた。わたしも子供の時、ずいぶんお経を読まされたものです。)

水谷 先生のお父様は、この土地の町長さんをされてたのですか？

安澤 そう、調布で町長(昭和23~30年)⁹をやっていました。

水谷 事業家でいらした。

安澤 そうですね。いまふうにいえば起業家ですね。

田良島 旧村で？

安澤 調布に住み着いたのは、幡ヶ谷で戦災にあい、焼け出されたあとのこと。生まれた時は芝区愛宕町に住んでいました。職住分離で、父は田村町¹⁰というところで洋家具商を営んでいた。田村町交差点から芝公園¹¹(そのプールで誰にも教わらないで、泳ぎを覚えました)のほうにむかう通りの両側に14、5軒、洋家具店が並んでいたかな。昔の『芝区誌』¹²、それに「安澤商店」の看板がかかっている写真が載っています。

(補記 - アールデコ風のデザインで繁盛していましたが、弟に譲って、新宿で料亭、調布多摩川でレストランを始めました。住まいは大原町¹³、そして幡ヶ谷中町¹⁴へと移りました。)

² 飛行館は1973年に航空会館に建て替えられた。http://www.aero.or.jp/gaiyo.html

³ 大倉集古館 http://www.shukokan.org/access/index.html

⁴ 虎ノ門金刀比羅宮 http://www.kotohira.or.jp/koutsu.html

⁵ 烏森神社 http://plaza.rakuten.co.jp/karasumorijinja/

⁶ 浄土真宗本願寺派光明寺神谷町光明寺 http://www.komyo.net/web/kamiyacho.html

⁷ 駐日オランダ王国大使館 http://japan-jp.nlembassy.org/

⁸ 萩の浄土真宗玄德寺は祖父の代で廃寺となりました。山口県文書館に玄德寺由緒書があり、閲覧したことがあります。<安澤>

⁹ 調布市市史編集委員会『調布市史研究資料V 行政史料に見る調布の近代』調布市1986 p.540 歴代町村長 調布町長 安沢秀雄 昭和23.8.6~30.3.31 昭和30.4.1 調布町・神代町合併、調布市誕生。安沢秀雄市長職務執行者となる。

¹⁰ 旧町名 現在の西新橋界隈

¹¹ 芝公園 http://www.tokyo-park.or.jp/park/format/outline001.html

¹² 東京市芝区役所編『芝区誌』(東京市芝区役所)1938年(千代田図書館、四谷図書館等に所蔵あり)p.1640 写真キャプション「田村町家具店街」

¹³ 世田谷区大原。最寄り駅は京王線代田橋です。今は環状7号線の敷地になっています。<安澤>

毛塚 『芝区誌』はお持ちでは？

安澤 ぼくは持っていません¹⁵。今、高いと思いますよ。もちろん『芝区誌』というのは戦前の版（初版）です。

水谷 慶應に入られる前は？ずっと慶應ですか？

安澤 ぼくは学部へ編入なんです。予科から学部へという旧制大学の時ですから。予科にあたるのはぼくの場合、高千穂経済専門学校¹⁶という永福町にある学校です。今、高千穂大学。そこになんとか入れてもらいました。ぼくは受験勉強が嫌いだね。受験勉強よりはるかに面白いことを沢山知っていましたからね。

（補記 - 卒業後、同級生の四分之三が国立・私立の旧制大学に進学するという変わったクラスでした。なお高千穂を受ける前に、ホテルオークラのところにあった大倉経済専門学校（現在国分寺にある東京経済大学¹⁷）を受けました。その脇にある大倉集古館が懐かしくて、試験の合間に集古館に入って中国青銅器をみているうちに、試験の事を忘れてしまう、という鈍なことをしました。鈍な性格はいまも変わりません。）

水谷 法学部卒業から、経済の旧制大学院に移られた。

安澤 経済専門学校で経済学はだいたい勉強したとうぬぼれ、高千穂の英書講読で迂回生産論¹⁸を読んで Hayek¹⁹を知り、翻訳の『資本の純粹理論』²⁰を探して読んだ。大学では別のことやりたいと法学部に入った。法学部は政治学科でした。政治学も結構、おもしろかったし、とくに社会学がおもしろかったですね。MacIver²¹の多元国家論とか、いろいろな本をずいぶん読みました。それで財政史に興味をもつようになったんです。

水谷 法科を卒業されて、経済の大学院に。

安澤 旧制の経済学部大学院に籍を置かせてもらいました。「大学院に入りたい」と言ったら、野村先生に「おまえは何を研究したいのか」と（尋ねられて）「日本経済史をやりたい」と答えたら、「そんな曖昧なことでは駄目だ、ちゃんとテーマを決めとけ」と叱られました。指導教授は野

¹⁴ 渋谷区の旧町名、現在の幡ヶ谷 3 丁目、笹塚 3 丁目辺り、最寄り駅は京王線笹塚駅。

¹⁵ その後、この記録化を機会に購入。

¹⁶ 現、高千穂大学 <http://www.takachiho.jp/outline/history.html> 東京都杉並区大宮付近に立地。昭和 19 年に高千穂高等商業学校から高千穂経済専門学校（旧制）に改称。翌年 3 月校舎が空襲焼失（以上は wiki から）

¹⁷ 東京経済大学沿革 <http://www.tku.ac.jp/tku/founder/history/>

¹⁸ Roundaboutness Eugen von Böhm-Bawerk オイゲン・フォン・バーム＝バヴェルク

¹⁹ ハイエク Friedrich August von Hayek (1899 - 1992)

²⁰ F. A. ハイエク著一谷藤一郎訳『資本の純粹理論』実業之日本社 1944

²¹ マッキーバ Robert Morrison MacIver (1882-1979)

村兼太郎²²です。実は卒業する年に「慶應の図書館に就職できませんか」と、当時図書館長だった先生に相談に行ったら、「図書館に入って、本だけ読んでいられるって思っているんじゃないのか、考え違いだ」と、また「お前の汚い字でカードを書かれたら慶應の図書館の名折れになる」とも叱られて、受けさせてもらえなかった。それで大学院に行くことにしたのです。1年後に高村象平教授²³の推薦状を持って、手書きでカードに書き込むことをする職場に、面接に行かされました。

水谷 先生、最初の就職先は？

安澤 それが（文部省）史料館なんですよ。就職とっていいのかな、実際、給料もらう段になったら「臨時筆生（りんじひっせい）」²⁴という名称の職種だったわけです。臨時雇いだから時間給で、3か月ごとに一度、切り替えで延長していく。

毛塚 昭和何年からいらしたんですか？

安澤 ぼくの頭の中では、昭和26年の10月だと思っていたんですけどね。史料館の履歴書の束には、次の年（昭和27年）の1月からってことになっていたんです²⁵。最初の3か月は見習い期間だったのかなあ？ ともかく、臨時筆生になって給料もらったのは10月からだったと思います。ぼくの記憶の中では、もらった給料の額は5000円か、6000円か、でね。仰天しました。

水谷 文部省史料館が国文学研究資料館史料館になるのですよね。

安澤 そうです。吸収されちゃったんです。

毛塚 戸越の三井文庫と一緒に敷地にあったのですよね？

安澤 三井文庫の建物・土地を史料館が購入したので²⁶、三井文庫の所蔵品が、かなり長い間、一緒に

²² 野村兼太郎（のむらかねたろう）（1896-1960）

http://kmj.flet.keio.ac.jp/outline_2.htm 慶應義塾大学文学部古文書室

http://kmj.flet.keio.ac.jp/outline_3.htm 同上 速水融「野村兼太郎先生と古文書」

<http://project.lib.keio.ac.jp/bdke/psninfo.php?sPsnID=20> 慶應義塾大学経済学部

²³ 高村象平（1905-1989） <http://project.lib.keio.ac.jp/bdke/psninfo.php?sPsnID=49>

²⁴ 国文学研究資料館所蔵『史料館レコーズ』A1-335 「昭和29年度臨時筆生賃金受領簿」によると月給は6000円ほど。『史料館レコーズ』及びこの史料の公表については高橋実「旧史料館レコーズの整理と公開について」『アーカイブズ・ニューズレター』No.8, 2008年3月

http://www.nijl.ac.jp/info/archives_news/archives_news8.pdf 参照。

²⁵ 『史料館の歩み四十年』では1951.9～からの在職扱いとなっている。

²⁶ 「史料館レコーズ」A-1-353～387 三井文庫関係資料

中田易直（中田易直先生談）「戦後の三井文庫と文部省史料館について」『三井文庫論叢』35号、2001年 公益財団法人三井文庫 史料館の歴史

<http://www.mitsui-bunko.or.jp/archives/history.html>

あったんです²⁷。三井文庫の史料を少しずつ史料館が買った時期もある²⁸んですよね。そのあと向うが独立することに決めたから、文庫の資料を引き継がないまま。

毛塚 史料館の所蔵資料の中に同じ敷地の中に三井文庫の書庫が3つぐらいあったんですか？

安澤 2つですね。

水谷 最初に文部省に入ったときの肩書きは何だったんですか？

安澤 「臨時筆生」。昔むかしのカビが生えた話だけ。

水谷 何年いらっしゃったのですか。

安澤 9年半です。

水谷 そのときにアーカイブという言葉はあったんですか？

安澤 「アーカイブ」ということばは使わなかったけれど、「文書館（もんじょかん）」という言葉は知ってましたね。「アーカイブズ」の訳語だとは思わないでね、「文書館（もんじょかん）」という施設があることは知ってました。というのはね、三井の蔵書の中に「欧米の古文書館見聞記」という手書きの記録があったんです。京都大学の国史の先生²⁹が書かれたものです。それを読むと、その中に Jenkinson ³⁰の名前が出てきます。だから「アーカイブズ」という言葉自体は、早くからごく一部の人には知られてはいたんですね。

水谷 アーカイブの訳語として文書館があったのですか？ それよりも以前から「文書館（もんじょかん）」という言葉はあったのですか？

²⁷ 三井文庫も、史料館も、同じ書庫を同時に使用していたので、通路をはさんで、片方は三井文庫、もう片方は史料館の書架という場所もあった。そういう場所で、たとえば三井文庫側の書架から資料が落下した場合、三井文庫の書架に正確に戻されないで、むかしの史料館の書架に戻されてしまうこともあった。（受入記録がなく由来不明の資料について毛塚氏が尋ねたときの原島陽一元教授談）

²⁸ 国文学研究資料館史料館編『史料館収蔵史料総覧』名著出版 1996年参照

²⁹ 三浦周行「欧米の古文書館(上)」『史林』第9巻第1号(1924年1月)「欧米の古文書館(中の一)」『史林』第9巻第2号(1924年4月)「欧米の古文書館(中の一)」『史林』第9巻第4号(1924年10月)「欧米の古文書館(下)」『史林』第10巻第1号(1925年1月)『史林』<http://www.shigakukenkyukai.jp/shirin/index.html> “史料館にある手書きの「欧米の古文書館見聞記」は、京都大学「史林」に掲載されたものを筆写したものだと思います。著者は三浦周行教授、文中にパブリック・レコード・オフィスを案内してくれた若い人の名前として「ジェンキンソン」がありました。” <安澤>

³⁰ Hilary Jenkinson (1882-1961)

Hilary Jenkinson, *A Manual of Archive Administration* Internet Archive にて閲覧可能
<http://www.archive.org/d-etails/manualofarchivea00jenkuoft>

安澤 「文書館(もんじょかん)」という言葉も概念も、江戸時代には使われていなかったと思いますね。「文庫(ぶんこ)」という言葉のほうが一般的だったと思いますね。だから「紅葉山文庫」³¹とか残っていますよね。

(補記 - 当時の人文科学研究課長犬丸秀雄³²さんの斡旋で、史料館設立に向けて識者の座談会³³があった。そこではアーカイブズということばが頻繁につかわれている。わたしは座談会記録の存在さえ知らなかった。さいわい筒井弥生さんのご努力で活字化されたので、ご覧ください。)

水谷 じゃあ「文書館(もんじょかん)」は「アーカイブ」の訳語なんですかね。

安澤 訳語としては「古文書館」が使われたんだと思いますね。

田窪 図書館みたいに？

安澤 ええ。ところがイギリスの制度を見てきた人が、あれは Public Record Office だと言うんで、Public Record = 公文書、公文書館という訳語をあてることになるんです。いまはイギリスでも Natinal Archives ³⁴が正式名称となっています。

毛塚 山口県文書館ができたのが、昭和 34 年ですよ。施設としては国内で初めてですよ？「文書館(もんじょかん)」ということばを使った施設は。

安澤 山口県文書館の人たちが盛んに言うけど、『図書館雑誌』に、図書館館長だった人³⁵が、アーカイブズというか、文書館というか、こういうのをはじめなければいけない、という論文³⁶を書き、また職員にシェンバーグの「Modern Archives」³⁷の翻訳をさせ、館員に配布し、読むことを薦めていた、と広田暢久³⁸さんは回顧談に書いています。図書館雑誌、どこまで読まれていたのか。図書館の人には当然、読まれていたでしょうが、歴史の人たちがそれをどこまで意識

³¹ 紅葉山文庫は内閣文庫に継承、現在は国立公文書館所蔵 参考「将軍のアーカイブズ展」

http://www.archives.go.jp/exhibition/haruaki_17_haru.html

³² 犬丸秀雄(1904-1990) <http://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/inumaruhideo.php>

³³ 人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系「アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究」プロジェクト編『研究成果報告 アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究』所収 資料「史料館に関する座談会」pp.171-193 解説は坂口貴弘

³⁴ The National Archives <http://www.nationalarchives.gov.uk/>

³⁵ 図書館長・鈴木賢祐(すずきまさち)山口県文書館創設時館長 <http://ymonjo.ysn21.jp/introduction/introduction.html>

³⁶ 鈴木賢祐 鈴木は自身の考えを『山口県文書館だより』に発表した。また館員に論文を発表させた。渡辺秀忠「文書館運動のための序説」『図書館界』9(4) 1957.12

³⁷ Theodore R. Schellenberg, *Modern Archives: Principles and Techniques*, University of Chicago Press, 1956 SAA サイトにて閲覧可能 <http://www2.archivists.org/sites/all/files/ModernArchives-Schellenberg.pdf>

³⁸ 広田暢久「山口県文書館の創立と展開(戦後地方史研究・運動の綜括と展望<150号記念特集>)(地方史研究と史料保存・文化財保護運動の点描)」『地方史研究』27(6)1977-12 「文書館と図書館」『図書館雑誌』77(9)1983.9 参照

したかは、それは全然、ぼくにはわからない。

毛塚 戦前の史学雑誌には「古文書館（こもんじょかん）」という言葉もつかわれた時代ですよね？

安澤 それがさっき言った京大の先生とか、東大でも、黒板勝美³⁹さんあたりは使っていました。ただどういう方法で、そういう仕事が行われているかという詳細は、わからないわけ。ぼくらには伝わってこない。あれはあると便利だよ、という感じ。請求書出せば、目の前にぱっと古文書が出てくる。あんな便利な施設が日本にもあったらいいな、便利だな、と戦前からの歴史の先生たちのご希望だったわけです。

水谷 文部省史料館でのお仕事と研究というのは、どんな？

安澤 入った時に「ここは研究機関ではない、研究をしてはいけない」と言われた。もともと史料整理を自分がやればよいなと思っていたし、業務として目録をつくることが自分の仕事だと思っていた。それもあって4年間、論文を書きませんでした。

水谷 目録、何に何で書いたのですか？

安澤 普通の（図書館の）目録カードに、ペンで。それに1点ずつ標題と作成年代、形態などを書き込むということ、入ったその日からやらされたもの。ぼんとひと山、史料を渡されてね。「この目録をつくりなさい」と。その前に、ぼくは野村さんの下で、目録づくりのまねごとみたいなことをやりましたからね。すぐに取り掛かりました。

田窪 文部省の規則みたいなもの、あったんですか？その当時はどういったデータのとり方やってたんですか？

安澤 あ、それは何もありません。マニュアルなんて渡されませんよ。

田窪 担当者、担当者によって、同じ史料でも、データのとり方がかわってくる？

安澤 人によって細かいことは違いますけどね。当時は、まだ三井文庫の人たちがいましたし、徳川林政史研究所⁴⁰というところでカード目録を作っていた所三男⁴¹さんがいたし。もう2年か3年、三井文庫の場所に移る前に、東洋文庫⁴²ってところで仕事が始まっていた⁴³んです。すで

³⁹ 黒板勝美（1874-1946）歴史学者、東京帝国大学教授。

黒板勝美『西遊二年欧米文明記』 文会堂書店 1911 NDL近代ライブラリ所収

⁴⁰ 財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所 <http://www.tokugawa.or.jp/institute/>

⁴¹ 所三男（ところみつお）（1900-1989）のち、徳川林政史研究所所長 所三男「文部省史料館のできるまで」『地方史研究』第27巻6号 1977年12月

⁴² 東洋文庫沿革 <http://www.toyo-bunko.or.jp/about/enkaku.html> 当時は国立国会図書館の支部だった。

⁴³ 昭和22年、文部省科学教育局人文科学研究課、学術史料調査委員会を置く。

に記入形式は慣行として定着していました。

所三男さんは、徳川林政史で目録づくりをやっていた。経験的に、図書館の目録カードのつくり方をまねていたのだと思いますね。だから1点ずつ、という図書館のやりかたを、いわばあてはめてるわけですね。

田窪 いちばん小さな単位で1枚1枚カードでとっていたわけですね。

安澤 ええ。

田窪 それでは膨大な量になりますね。

安澤 ただ、予算がないから、なるべく、同じようなものは、まとめて一枚のカードにまとめて書け、というような話がありました。

田窪 (史料を) 探すのは作成母体から探すということですか？

安澤 作成母体毎というのは慣行としてあったわけです。

田窪 作成母体以外からも探せるようになっていたのですか？作成母体からだけですか？

安澤 作成母体からのみですね。「〇〇家文書」というふうに。

毛塚 「家わけ」が基本でしたよね？ 近世文書の整理のルールは、家単位で、という。

安澤 はじまってからの慣行だと思うけれどね、分類項目の検討会みたいなのがあって、そこでいろいろなことが議論されていました。近世史研究が盛んになるにつれて、近世史料の分類はこうやるのだという試案がいろいろ出てきたんです。当時は誰でもが、史料の所蔵者のお宅へ乗り込んでいって、「(史料を) みせてくれ」「はい、見せましょう」ということで、そこで目録づくりをはじめるということをね、やりましたからね。

史料館ができる直前ぐらいに、近世庶民史料調査委員会⁴⁴というのが設置されて、当時として大きな研究費をとって、全国で100人以上の調査員を委嘱して、各府県ごとに、2、3人ぐらいずつ、その人たちが、自分の住んでいる故郷へ戻って、そこで庶民史料、当時でいえば名主の

東洋文庫内文部省分室を事務局とする。昭和22年に予算50万で収集事業開始。

収集史料は東洋文庫の書庫の一部を借用し臨時に収蔵した。(国文学研究資料館史料館編『史料館の歩み四十年』国文学研究資料館史料館 1991年より)

⁴⁴ 庶民史料調査委員会は1948(昭和23)年6月発足。以後5年間にわたり全国的な史料所在調査を実施。成果は昭和27年から30年にかけて『近世庶民史料所在目録』第一輯～第三輯として公開(学術振興会発行)。同会会長は小野武夫、副会長が野村兼太郎(のち会長)。(国文学研究資料館史料館編『史料館の歩み四十年』国文学研究資料館史料館、1991年、p.4)

家、地主さんの家、そういうところの史料目録をつくりはじめるわけです。そのときの庶民史料調査委員会の目録作成要領が印刷されていて、その人たちに配られていました。

若月 ところで、旧制大学では経済学部でいらっしやいましたよね。経済学部で経済の歴史みたいなことをおやりになっていたのでしょうか？

安澤 そうですね。ぼくの先生、野村兼太郎って人は、江戸時代の名主や地主がもっていた資料を古本屋から買入れて、自分で整理して、カードに書いて、自分の研究に役立てた人なんです。史学科出身でない人で、そういう原史料、オリジナルの史料、データを使って研究をはじめた最初の人なんです。

若月 今でいう史学科の分野ですね

安澤 大正の中頃から、経済学部の中に経済史という分野が独自の科目として成り立つようになるわけです。

野村さんはケンブリッジに留学して、むこうで産業革命というか、資本主義成立過程の研究をやるわけです。そこで痛感したのは、日本人が外国に行って、オリジナルの史料を探して、オリジナルの研究をすることは難しい、と。振り返って日本をみたら、日本にはいっぱいあるじゃないか、と。そういうことで、日本に帰ってきてから、西洋経済史から日本経済史に方向転換するわけです。そのときに、持っていた洋書をだいが売って、資金をつくり、古本屋を通じて、文書（もんじょ）を買い集めたんです。ですから、まとめて出てくるわけではないんです。古紙（ふるがみ）として出てきたものの中から、言ってみればバラバラと野村さんの手元に入ってくる。野村さんは、とにかく買い集める。たくさん集まったので、そこからいろんな仕事ができたとですね。

史学科の人たちにとって、近世は歴史研究のメインの対象ではなかったですね。昭和のはじめには社会経済史学会⁴⁵ができたし、京都大学に経済史研究会が結成されて、野村さんがやっているようなことをやるようになってくる。そこで社会経済史学会ができたとき、最初の代表理事になるのかな、いや、最初じゃないか。いま記憶があいまいです。

（補記 - そのころ澁澤敬三⁴⁶さんがアチックミュージアム・祭魚洞文庫で漁業資料などを収集し、活字化していました）

毛塚 近世史が、戦前、研究対象になっていない現状があるので逆に、東大の経済学部資料室、大阪大学とか、そういうところで近世の資料が集められたのですか？

安澤 阪大に経済学部ができるのは戦後です。戦前の東大経済学部に土屋喬雄⁴⁷さんがいました。

⁴⁵ 野村兼太郎は 1935 年の創設メンバー及び 1946 年から代表理事。

http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00406090_jp.html

⁴⁶ 渋沢敬三（1896-1963）日本銀行総裁、大蔵大臣等を歴任。渋沢敬三編著『豆州内浦漁民史料』アチックミュージアム 1937-39

⁴⁷ 土屋喬雄（1896-1988）経済学者 東京大学教授 東京大学経済学図書館文書室には土屋家旧蔵文書があ

さて、大正から昭和にかけて、いわゆる「地方書（じかたしょ）」と呼んでいます。幕府や藩の役人の中で、とくに郡（こおり）奉行という、地方行政を担当していた「地方巧者（じかたこうしゃ）」が、執務要領みたいなものをつくっているんです。著作として書いているわけです。これを全国規模で集めて、大正の中頃に滝本誠一編の『日本経済叢書』五十何巻⁴⁸になる膨大な資料が翻刻されています。それがのちに『日本経済大典』と拡大されます。戦前でも、これをデータとして使って近世を研究する人たちが増えていくんです。戦後派のぼくは、地方書は役人が書いたものだからオリジナルではないんだ、だからオリジナルな研究とは言えない、と思っていたんです。それで野村さんに弟子入りしたんです。戦後に近世庶民史料調査委員会が全国的にナマの史料を発掘していくものですから、みんな飛びついて、論文を書くわけです。

戦前からやっていたのは野村さんぐらいのもですよ。それにときどき、経済史研究所の、今は日本経済史研究所⁴⁹という、京都大学の人たちが、当時、史学科でやっていた「史料探訪（しりょうさいぼう）」という、全国の社寺をまわって、古文書を見て歩く、これをまねて、史料探訪に出かけていく。その成果のひとつが、菅浦（すがうら）文書。琵琶湖のいちばん北の端に中世以来の村がありまして、そこから史料をみつけて、論文⁵⁰を書く、という。この論文は素晴らしいですね。それを書いたのは、いま名前が浮かび出てこないけど、京都大学の方でした。

田窪 戦後の社会経済史がブームになって、みんなが一所懸命史料を発掘にいきましたね。戦前から史料を使われてはるのはお一人くらいだったにしても、戦後の社会経済史の史料発掘のブームのときに、日本では文書館(ぶんしょかん)をつくろかという動きはでなかったんですか？

安澤 その動きの成果が文部省史料館なんです。

田窪 そうか。社会経済史のブームが史料館をつくった、と。

安澤 一方で近世庶民資料調査委員会を組織し、他方、地方史研究協議会⁵¹が結成されて、そのメンバーが名主さんの家を訪ねて、資料を掘り出してくるでしょ。それと平行して、どんどん紙くずとして燃やされてしまう史料をなんとか保存するという仕事を同時にしなければならない。その収容先として、史料館をつくろうということになった。

る。 <http://e-server.e.u-tokyo.ac.jp/~takeda/tsuchiya/index.htm>

⁴⁸ 滝本誠一編『日本経済叢書』日本経済叢書刊行会 1914～ 全 36 巻、続日本経済叢書として大鑑閣から 1923 年に数巻刊行あり。『日本経済大典』史誌出版社 1928 は全 54 巻

⁴⁹ 大阪経済大学日本経済史研究所 <http://www2.osaka-ue.ac.jp/CGI/view.cgi?seq=125> 沿革

⁵⁰ 赤松俊秀「供御人と惣：近江菅浦の歴史」『京都大学文学部紀要』第 4 号（1956 年 11 月）

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/72889>

<http://hdl.handle.net/2433/72889>

菅浦の研究は数多いが、赤松俊秀論文はごく初期になされたもの、読んだ時に中世と近世を繋ぐ事例として強く感銘しました。 <安澤>

⁵¹ 地方史研究協議会 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/chihoshi/kainituite.html>

田窪 わかりました。わたしの中でストーリーがつながりました。

安澤 野村さんが、社会経済史学会の代表理事であり、かつ地方史研究協議会の会長である、ということ、看板にし易かったんですよ。ただ戦後のマルクス主義的な歴史研究をやっている人たちからみると、野村さんという人は、英国の実証主義の流れを汲む人だから、ということで、そういう人たちにはあまり評価されていなかったですけどね。

水谷 文部省がその時集めた資料とか、お仕事、史料は国文研に引き継がれているんですね。

安澤 はい。

水谷 話を進めますと、桃山学院大学にはどうして行かれたのですか？

安澤 その話をする前にエピソードを一つ、野村さんに「結婚します」と二人で報告しにいったら、「おまえ、まだ若すぎる」と叱られ。「先生いくつで結婚したんですか」とおミネさんが尋ねたら「うん、おれは30歳だ」という。それを聞いて「わたしも30です」と言ったもんだから、野村さん、「しょうがねえな」と認めてもらえた。

結婚してから3年目、昭和33年に先生の家と呼ばれていった。「きょう、おミネさんを連れてこなかったのか」と言われて、「お腹が大きくなったので遠慮しました」と言ったら、「おミネさんがいないと話にならないが、おまえ、大阪に行く気あるか？」と。桃山学院大学⁵²が創設の前年だったんです。創設時の教員メンバーに入れてもらえたわけです。

水谷 その経済学部に行った。

安澤 いわゆる一般教育課程が終わって専門課程が始まったら赴任ということで、実際に給料をもらえるようになるのは、昭和36年なんですよ。昭和33年、申請する時に「おまえ、東京にいるから」と文部省に申請書を出しに行く時、ずいぶん手伝わされました。そのおかげで、史料館の臨時筆生のままではみっともない、ということなんでしょうか、たしか、昭和34年⁵³の半ばか、暮れぐらいに、「雇員(こいん)」にしてもらえた。

中村 ふ～ん。

安澤 9年目ですよ。

田窪 それまでずっと「臨時」がついていたのですね。

⁵² 桃山学院大学 St. Andrew's University <http://www.andrew.ac.jp/>

⁵³ 国文学研究資料館所蔵『史料館レコーズ』A1-334「二十九年度臨時筆生勤務命令簿」によると昭和34年1月16日から常勤職員とある。

安澤 うん。

田窪 うわ～。

安澤 次の年、昭和 35 年に「文部事務官」⁵⁴になって、そして1年して移った。おかげさまで、雇員、事務官だった時期の分は、あとで年金期限に加算されました。

毛塚 元同僚の先生から、ただ食べられないからみんなから出て行ったと聞きました。今でいう官製ワーキング・プアですよ。

安澤 亡くなったけど、大石慎三郎⁵⁵さんも、3年在職して、高崎経済大学に移り、それから学習院大学へね。あと、ぼくの同僚としては、愛知教育大学から福山大学に移った吉永さん⁵⁶という人がいました。この人が6年目ぐらいに、高等学校の先生になり、しばらくして愛知教育大学に移りました。吉永さんの補充として、学習院大学を出た人が臨時筆生として入ってきたんですが、このひとは2年ぐらいで辞めちゃいました。ぼくのあとの補充は、文部事務官として採用してもらえるようになった。ぼくのあとに入ったのは、大野端男⁵⁷さんなんです。

梁瀬 移ってからは文部事務官？

安澤 いえ、桃山学院大学は私立大学なので、専任講師からはじまって、昭和 38 年に助教授になって、昭和 40 年に教授に昇格しました。それは業績があったからではなく、教授の数が足りなくなったから。39 歳で教授は早すぎるんです。恥ずかしかったな。

中村 先生が文部省に入ったころは、まだ戦後間もないことで、事務官になられたのも、日本全体が、戦後の 10 年、激動の時代、食べていくだけが精いっぱい時代でしたからね。

安澤 昭和 24 年に文部省史料館ができることが決まった。その設置の準備として、東洋文庫に居をかまえて、仕事をはじめていた。史料がどんどん入ってきたようです。文書の整理だからということでしょうか、当時の女子専門学校を出た人が採用されていた。大石慎三郎さんは、最初のと時からいた人だけれど、どういうわけか臨時筆生だった。

田窪 専門学校出た女性というのは、いわゆる女専（じょせん、女子専門学校）ですか？

安澤 いわゆる女専。

⁵⁴ 退任時職名は「文部事務官研究職」

⁵⁵ 大石慎三郎（1923-2004）1949.4～1952.3 在職

⁵⁶ 吉永昭 1951.4～1958.3 在職。高等学校は開成学園。愛知教育大学・福山大学名誉教授

⁵⁷ 大野端男 1961.6～1983.3.31 在職。東洋大学名誉教授

田窪 今でいう短期大学相当。

安澤 それが浅井潤子⁵⁸さんとか、鶴岡美枝子⁵⁹さんです。

田良島 上部組織は？

安澤 上部組織は学術課、直結。最初の設置構想から半分以下の規模にされ、学術課の構成部分になってしまったようです。野村先生がぼくを入れようとしたときは、たぶん文部事務官（研究員）という身分で採用される、とっていたみたいです。採用されてかなり経ってから野村先生に「おまえはどういう身分だ」と尋ねられて、「臨時筆生です」と言ったら「何だ、それは」と、野村さん、びっくりされた。なにしろ野村さん、史料館評議委員会の委員長でしたから。

筒井 予算が削減されたのは？

安澤 昭和 24 年というのは、日本中、すごい金欠状態で、政府が予算を大幅に減らした年なんです。どっちもこっちも、どっちみても削減、削減。そのあおりをくらっちゃったわけです。

毛塚 さっき、目録の話がでていましたが、文部省史料館では近世史料取扱講習会⁶⁰をはじめていました。文部省史料館の、史料の整理の仕方、目録の取り方、分類の仕方が講習生を通じて、近世の史料整理の全国の標準になっていきましたよね。そのぐらいの頃からですか、先生が標準に興味をもたれたのは？

安澤 仕事を始めて 2 , 3 年でだいたい要領がわかってきましたが、臨時筆生であるぼくらは教える立場にはいません。えらい先生がいっぱいいましたからね⁶¹。児玉幸多⁶²さん（学習院大学学

⁵⁸ 浅井潤子教授 1948.10～1991.3.31 在職

⁵⁹ 鶴岡美枝子教授 1949.4～1993.3.31 在職

⁶⁰ 近世史料取扱講習会 昭和 27・1952～昭和 37・1962 年、昭和 41・1966～昭和 62・1987。 昭和 63・1988 史料管理学研修会と改称、のち現行のアーカイブズ・カレッジへと継承される。

⁶¹ 近世史料取扱講習会 第 1 回講習会の科目内容（昭和 27 年 9 月 8 日～20 日）

会場：史料館、自然教育園（目黒）

近世史料概説（6 時間）：野村兼太郎（慶應大教授） 宝月圭吾（東大助教授）

支配文書（8 時間）：渡辺世祐（明大教授） 石井良助（東大教授）

農山村文書（12 時間）：古島敏雄（東大助教授） 所三男（史料館調査員、徳川林制史研究所員）

都市文書（8 時間）：豊田武（東北大教授） 山口栄蔵（文部省史料館員）

海村文書（6 時間）：桜田勝徳（日本常民文化研究所長） 宇野脩平（同研究所常務理事）

民俗史料（6 時間）：和歌森太郎（東京教育大教授） 遠藤武（文部省史料館員）

講読（12 時間）：児玉幸多（学習院大教授） 中井信彦（史料館調査員、元三井文庫職員）

整理補修実習（10 時間）：遠藤武（文部省史料館員）（国文学研究資料館史料館編『史料館の歩み四十年』国文学研究資料館史料館 1991 年 pp.8-9）

長)もそうだし。当時の近世史研究者が急速に増えてきていましたから、その人たちを集めて講習会を開いた。

中村 最初に近世史は研究対象ではなかったとおっしゃいましたよね、戦後、どうして研究のブームは起こったのでしょうか？

安澤 戦前から、地方書(じかたしよ)が刊行されるとか、言ってみれば、アマチュアの郷土史家が、日本全国にいっぱいいたんです。その人たちは、身近にあるムラの歴史を知りたいってことではじめる。その人たちは、印刷物を通じて知識を得る⁶³わけです。当時の江戸時代に書かれた「地誌」などが活字化されていますから。この辺(武蔵国の場合)だと『新編武蔵国風土記稿』⁶⁴というのがあります。

もうひとつの知識源は、大正の末ぐらいに、郡役所が廃止された時に、それぞれの郡が、歴史を編纂して、後世に残そうというのが全国的にはじまるんです。もちろん県史もね、当時、盛んにつくられる。昭和の始めにはほとんどの県が県史をつくる。

中村 それは郡⁶⁵との関係があるんですか。

安澤 地方行政の中間組織が廃止されると、行政に変化が起きるでしょう。そこで歴史を伝えていきたいという動きが非常に盛んになりましてね。かなり多くの郡史が刊行されている。なかでも『滋賀県史』⁶⁶もよくできていましたし、滋賀県下のいろんな町村史もね、いっぱいできます。いろんなところで郡史が出来るんですよ。そうした郡史のもとには、明治以来の、歴史編纂の過程にあるんです。そういうときに、その仕事、郡史や町史を書く人たちが、古代・中世は大学の専門の先生にお願いして、近世のところは、自分たちで全面的に対応する。(彼らにとっては)じい様たちの時代ですから、聞き書きとか、編纂書とか、たくさんありますから。江戸時代に地誌のたぐいなどたくさんある。そういうのをつかって、研究し、また書いていったわけなんです。

それから産業史をね、いろんなところで、たとえば「阿波藍沿革史」⁶⁷とか。特産品の歴史を編纂しておこうという動きが出てくる。そういうのは、博物館なんかとも関係深いわけですよ。そういう資料が博物館に入っているケースは多いですよ。

だから、戦前に全く近世史研究がなかったとは言えない。大学の先生で、近世のオリジナル資料を使って研究をしたというのは野村さんが最初ではあっても、そうでない人たちがいっぱいいたんですよ。ただ、古文書を読み、史料批判する訓練をうけていない人がやるものだから、我田引水的な話が多くなってしまいうんですね。

⁶² 児玉幸多(1909-2007)学習院大学名誉教授、元学長。

⁶³ くずし字で書かれた原史料をいちから読み解き起こすのではないということ。

⁶⁴ 間宮志信編『新編武蔵国風土記稿』

⁶⁵ 郡 明治11年施行「郡区町村編制法」による。大正10年郡制廃止法制定、大正15年郡長、郡役所の廃止。

⁶⁶ 滋賀縣編『滋賀縣史』滋賀縣 1927.3-1928.3

⁶⁷ 西野嘉右衛門編『阿波藍沿革史』西野商店 1940

水谷 そこはアマチュアだということですね。

田窪 そういう動き、例えば戦後の社会経済史ブームは、ぼくらが聞いているところだと、戦前の信長、秀吉や家康の歴史ではなくて、戦後は、その当時の左翼的な雰囲気もあって、庶民の歴史をこれからやるんだという問題意識が戦後めばえて、社会経済史に情熱をもやす歴史研究者が出てきて、いろんなどころの資料を発掘にいったという話をきいたことあるのですが。

安澤 戦後というより、戦前からすでに、町村史・郡史の編纂の中で勉強している人たちがたくさんいたのです。つまり郷土史家がいっぱいいたわけですよ。

田窪 ぼくの聞いた話は実はある程度単純化された話であって、戦前からのつながりとしては複眼的に見ないとほんとのところは見えてこないわけですね。

安澤 見えてこないですね。

毛塚 地方史研究協議会は戦後できますよね？

安澤 戦後です。だから3本柱なわけです。

- ・近世庶民史料調査委員会
- ・文部省史料館
- ・地方史研究協議会

とね。実は3本柱なんです。

毛塚 地方史研究協議会は、郷土史家も、研究者も含めた、当時のいわゆるネットワークだった。

安澤 それまでは郷土史家は、お国自慢的な部分が多いから。そうではなくて、オリジナルな資料にもとづいた実証的な研究をやるという形で、地方史研究がそこで産声をあげるわけですね。その産声をあげる頃に、イギリスでも、*Local Historian* という雑誌があって、これが活躍しているんですね。

最初は、*Amateur Historian*⁶⁸ という名称の雑誌なんです。それが、とくに、レスター大学⁶⁹ というところに、地方史学科 Department of Local History ができて、同じときに、ミュージオロジー Museology 学科がレスター大学にできるんですよ。

イギリスの動きをかなり気にしている識者がいたんです。たぶん野村さんも、それから亡くなっちゃいましたけど、早稲田大学政経学部の小松芳喬⁷⁰さんという、経済学科の先生ですが、

⁶⁸ *The Amateur Historian* は1952年創刊1967年まで刊行、後継誌 *Local Historian* は1968年から。

⁶⁹ レスター大学 University of Leicester <http://www2.le.ac.uk/>

同 Centre for English Local History <http://www.le.ac.uk/elh/>

⁷⁰ 小松芳喬教授（早稲田大学政経学部教授）はイギリス経済史、特に産業革命史を専門としていた。*The Amateur Historian*、のち *The Local Historian* The Local historian : the quarterly journal of the Standing Conference for Local History と改称する雑誌の定期購読者、ご自身の著書の他にピータ・マサイ

産業革命史の研究者がいて、イギリスの産業革命に非常に造詣が深く、このひとの蔵書の中に、*Amateur Historian*、*Local Historian*、両方がありましたね。レスター大学というところがその発祥の地になるわけです。

レスター大学の先生が書いた本に *The Making of the English Landscape*⁷¹ があります。イギリスのいろんな地方の写真と組み合わせて、景観史として書かれた。これは名著だと思います。

それをレスター大学地方史学部に留学した古島敏雄⁷²さん、東大農学部の教授ですよね。彼が、『土地にきざまれた歴史』⁷³を書いたのは、*The Making of the English Landscape* に触発されたことだと思います。中身はだいぶ違いますけどね。

中村 イギリスからみていて、っていうのはけっこうおもしろいポイントですよ。

若月 レスター大学はいまミュージオロジーで有名ですけど、ローカルヒストリーと 発祥が同時で、表裏一体というのは非常に興味深い。

安澤 残念ながら、表裏一体とはいえない。学部ができちゃうと、学部相互の関連性はどうもないみたいなんですよ。まだ MLA 連携という考え方は熟していなかった。

レスター大学で、ローカルヒストリ学科をつくった人⁷⁴の愛弟子が、ぼくらがオクスフォードでお世話になった Thirsk⁷⁵さんなんです。最初はレスター大学にいて、あとになって、オクスフォード大学に移りました。日本に来たとき、ぼくがまだ関西にいたころだったので、社会経済史学会の関係でお世話しました。加えて女房が通訳したもんだから、Thirsk さんがイギリスに来ないかと誘ってくれました。それでぼくらはオクスフォードでお世話になることになったんです。

水谷 先生は慶應で博士号をとったのは、桃山にいた時に、ですか？

アス「最初の工業国家」の翻訳がある。野村教授急逝後の社会経済史学会代表理事、また高村象平（慶応経済学部教授・塾長）と親友でした。＜安澤＞ 小松芳喬（1906-2000）イギリス経済史学者 早稲田大学大学史資料センター http://www.waseda.jp/archives/materials/prv/komatsu_i.html

⁷¹ Hoskins, W. G. *The Making of the English Landscape* (Leicester, 1955)

⁷² 古島敏雄（1912-1995）農業経済史学者 東京大学農学部教授 飯田市美術博物館サイトより <http://www.city.iida.lg.jp/iidaspypher/www/info/detail.jsp?id=1594>

⁷³ 古島敏雄『土地にきざまれた歴史』岩波書店（岩波新書 青 657）1967年

⁷⁴ レスター大学地方史学部を創設したのがホスキンス教授(William George Hoskins)であり、古島敏男教授の留学先でした。その時、I. Joan Thirsk が講師として在籍していて、古島教授は親交を結んだようです。ジョン・サースクさんは、のちオックスフォード大学経済史学科にリーダー、Reader として招聘され、マサイアス教授のもとで教鞭をとっていた。私どもは彼女の推薦でオクスフォード大学オールソウルズ・カレッジ（マサイアス教授の所属するカレッジで、マサイアス教授の主催する国際セミナーに参加）での在外研修、さらにミネはサースクさんの所属するセントヒルダズ・カレッジ（University of Oxford, St.Hilda's college <http://www.sthildas.ox.ac.uk/>）にフェロウとして招聘されました。退職後は欧米各国に招聘されたとのこと。イギリス農業史の権威です。日本にも数回、お出でになり、その都度、私どもが日本各地をご案内しました。オックスフォードの大学制度と、教授・リーダー、講師・フェロウの関係はややこしくて、簡単に説明できません。＜安澤・電話で補遺＞

⁷⁵ Joan Thirsk (1922~) http://www.history.ac.uk/makinghistory/historians/thirsk_joan.html

安澤 桃山にいたときです。昭和 46 年に貰ったのかな。学部出て 20 年目でした。

水谷 そのテーマは何と言う？

安澤 「近世村落形成の基礎構造」

水谷 それが 1973 年の吉川弘文館の本⁷⁶ですね、これが博士論文に相当するのですね。

安澤 それのもと、昭和 30 年～33 年にかけて書いた 4 本の論文です。その時期に、ほとんど出来てたわけです。多摩丘陵の中にある連光寺村という村の史料⁷⁷ 1 万点以上あります。はじめて見たのが昭和 23 年、最終的には史料館にいれましたけれど、そこのご主人と父が町長として仲良かったものですから、ぼくも史料みることに面倒みてもらえて、そのお宅の史料を使えた。農村史研究はぼくにとって手習い草子でした。本音を言うと、本格的にやりたかったのは藩財政史なんです、そこにたどりつくのにずいぶん時間がかかった。

（補記 - 法学部学生であったにもかかわらず、経済の野村先生のゼミに参加させてもらい、「美濃国本巢郡神海村宗門人別改聴」の筆写と長期人口分析をやりました。神海村が大垣藩領であったことから、大垣藩地方雑記⁷⁸や座右秘鑑といった地方書を精読しました。そして昭和 31 年に大垣市立図書館に調査に行き、「定帳」という史料にめぐり合い、大垣藩統治の基本理念と行政組織を検討できました。論文名は注記 73 参照）

田良島 国文学研究資料館・史料館にうつられるのは、1978 年？

安澤 そうですね。以前の史料館を辞めて 17 年後の昭和 53 年。国文研ができて⁷⁹から数年してからです。そして移って 2 年目ぐらいに、行政管理庁の査察⁸⁰が入りました。国文学研究資料館付置史料館という位置づけを、吸収されたんじゃない、のだというように、史料館の人たちは思っていた。

ぼくがなぜ戻ったのかというと、以前つくりたかった目録を、手が出せないままで辞めちゃったんです。それが「上神谷(にわだに)小谷(こたに)家文書」⁸¹という膨大な資料なんです。

⁷⁶ 安澤秀一『近世村落形成の基礎構造』吉川弘文館 1972.3 刊

⁷⁷ 富沢家文書 国文学研究資料館史料館『武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書/富沢分家文書』(史料館所蔵史料目録 第 6 集) 1957.3

⁷⁸ 大垣市史編纂室 <http://www.city.ogaki.lg.jp/0000002025.html>

⁷⁹ 国文学研究資料館は 1972 (昭和 47) 年 5 月創設

⁸⁰ 1982 (昭和 57) 年行政管理庁の「勧告」とは、1981 (昭和 56) 年 4 月に開館した国立歴史民俗博物館と事業内容の面で、歴史資料の収集・保存とその研究という点で類似性があるので、統合してはどうかという「勧告」。

⁸¹ 『和泉国大鳥郡上神谷豊田村小谷家文書』(史料館所蔵史料目録 第 36 集) 1982.3

<http://www.nijl.ac.jp/info/mokuroku/36-k1.pdf>

http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/MetSearch.cgi

それを位置づけでいうと、東の富沢家文書、西の小谷家文書というくらい中身の濃い史料なのです。上神谷（にわだに）のほうが、ずっと古い村ですけれど、近世初頭の史料がよく残っている史料群だったんです。それが比較できれば、おもしろいなと思っていて。入手の最初のきっかけは、ぼくが作ったんです。ところがいざそれが史料館に搬入されたら、所三男さんに「これはおれがやるぞ」と取り上げられてしまった。ぼくは横で指をくわえてね。その間に京大の朝尾直弘さんや脇田修さん⁸²たちが来て、論文書いて、というトンビに油揚げさらわれたような気でいたわけ。史料館に帰ってこないか、といわれた時、小谷家文書目録ができてないんです、文書を引き取りに堺に行ったときに、この目録はぼくが作ります、と小谷さんに言ったんです。それが頭の中から消えないものだから。今度帰ったら、おれが目録つくるんだ、と。それでも帰ってすぐにやらせてもらえなくて、3年くらい経ってから、やっと、ぼくがやります、と宣言して始めた。なんとか在任中に作れました。たぶんそれまでに史料館で出した目録の中で、一番厚い目録だと思います。

水谷 近世の文書の目録をとるといってお仕事と、あとで駿河台大にできる文化情報学部とか、あるいは、いわゆるサイエンスとしてのアーカイブズ学。それがご自分の中で自覚的にそういう方向にいった発端というのはやっぱりイギリスなんですか？

安澤 うん、直接的にはね。ただね、昭和40年頃にね、数量経済史研究会というのをつくろうという、その準備会の準備会をやったことがあるんです。文化勲章もらった速水融（あきら）⁸³さんがよびかけ人で、神戸大新保博⁸⁴さんとか、大阪大安場安吉⁸⁵さんとか、同志社大学安岡重明⁸⁶さんとかが、芦屋のわが家に集まって、相談ごとしたことあります。その三日間の会合の終わったとき、数量経済史研究会⁸⁷を立ち上げるときに参加してくれますか、と聞かれて、「ぼくはほかにちょっとやりたいことがあるんでね」と言って、メンバーに加わらなかったんです。数学的思考に欠けているという自覚もありました。

（余談 - ぼくが桃山に移っばかりのころ、桃山学院大学理事長八代斌助⁸⁸さん（日本聖公会総裁大司教）に個人保証人になってもらい、無担保で銀行融資をうけ、芦屋に家を建てた。）

その理由はね、ぼくの頭の中に目録をつくるという仕事に対する、なんといいですかね、ノスタルジーみたいなものがまだ残っていたんです。むこう（桃山）にいて、いろんなところに史料探訪に行きはじめてたころです。ただ桃山にいた間、とうとう目録づくりはやれなかった。大学の先生になっちゃうと、そういう時間的余裕がない。専念してられない。学生使ってやる方もいたけれど、ぼくには、それができない。つまり学生にカード書かせて、それをぱっと集めて、つくるといいうやり方ができないんです。

⁸² 朝尾直弘（1931～）京都大学名誉教授、脇田修（1931～）大阪大学名誉教授、日本近世史

⁸³ 速水融（はやみあきら）（1929～）国際日本文化研究センター・慶應義塾大学・麗澤大学名誉教授 2009年文化勲章受章

⁸⁴ 新保博（1923-）

⁸⁵ 安場安吉（1930-2005）

⁸⁶ 安岡重明（1928-）

⁸⁷ 数量研究史(QEH)研究会については以下を参照。数量研究史(QEH)研究会「日本における社会経済史の発展と新保史学：数量経済史研究への軌跡」『国民経済雑誌』189巻 pp.75-110

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/00055904.pdf>

⁸⁸ 八代斌助の娘による紹介 <http://kazukoyashiro.blogspot.com/2008/09/blog-post.html>

自分でひとつひとつ中身を見て、何が書いてあるか、それをどう要約できるか、どういう位置づけになるのか、それをずっと長年やっていたし、史料みるたびに、そういうこと考えて論文書いてきましたし。学生にやらせるわけにはいかない、という気持ちがあって。桃山にいたころは、それでも何軒かのお宅に伺って、ずいぶん資料をみせてもらってきたんだけど、昭和40年の頃にはその気持ちがまだあったんですね。

やりたいことというのは、史料批判をふくめて、のちに「史料学」といわれるようになった分野なんだけど、そういうことのほうが、数量経済史より面白くて、ぼくも参加できるだけの仕事はしてましたけれど、そっちに踏み切れなかったんですよ。

そこへ史料館から、当時の館長だった榎本宗次⁸⁹さんが訪ねてきてましてね、史料館へ戻ってこないかといわれて。それでも生活のこと考えると、昔の臨時筆生だったときのことしか頭に浮かんでできませんからね、妻子を養っていけるのか、悶々と3か月ぐらい考えこんでしまって、すぐ返事ができなかった。1月も半ばぐらいかな、女房に話をしたら、あなた行っていいわよ、とあっさりいわれて。

水谷 それで単身赴任。

安澤 次の学年の準備をやってる最中ですよ、学生募集から、学年末の試験の準備とか、そんなのはじまってる最中に、臨時に教授会にかけてもらって。最後の最後のこんなドタンバでおまえやめるのか、とみんなに叱られながら、移ったんです。

(補記—桃山に在勤中、文部省委嘱司書資格講習会で<特殊資料 - 近世史料の整理>について、講師をしていたので、図書館主事であった木原通夫さん(慶応の図書館学科卒、たしか井上如さん(国立情報学研究所名誉教授 元学術情報センター副所長)と同期、のち椋山女学園大学大学図書館学教授として転出)のご好意で、わたしも司書資格を認定してもらいました。つまりみなさんの同業の仲間でもあります。)

中村 そのとき、奥様は神戸女学院大学で教えていらした。ちなみに奥様は先生の同窓生でいらした？

安澤 先生は一緒ですけど。あの人はね、学部的时候は、高村先生⁹⁰という、当時、中世のドイツ経済史とアメリカ経済史を教えていた人の弟子で。ウエストバージニアのプランテーション⁹¹をやっていたんです。あの人は制度でいうと、新制になるんです。ぼくは旧制の最後だったんです。大学によって切り替えの時期が違ってきます。慶應の切り替えの時期だったので、女房は新制の経済学部編入となったんです。

学部は高村さん、マスターコースで野村さんに移る。そのあいだの3年間、酒田で高等学校の先生をやっています。もともと大学院進学を希望していたので、高村先生から進学をこれ以上伸ばせないよ、と駄目をおされまして。ところが酒田で、その地方のナマの史料を見るという

⁸⁹ 史料館に戻った時の館長は榎本宗次さんでした。国文研は初代館長市古貞次、その後が小山弘志(一高で児玉幸多さんと同期)でした。<安澤> 榎本宗次(1924~1967)1967.7.1~1982.3.11 在職 在職中死去

⁹⁰ 高村象平 <http://project.lib.keio.ac.jp/bdke/psninfo.php?sPsnID=49> 註22

⁹¹ ミネの学部卒業論文テーマはバージニア煙草プランテーションです。<安澤>

ことやったので、オリジナルの史料を読む方がおもしろいわ、その上、本間家⁹²という日本有数の大地主の家のお嬢さんと仲良しになるというようなこともあって、マスターは野村先生のところにと心変わりした。それで高村先生から「おまえおれを裏切る気か」と叱られて（笑）というような一幕もありましたんですけど、おっしゃるように、同窓というか、同じ先生についていたことは、ついていました。

水谷 1978年国文研に移られて、8年後に『史料館・文書館学への道』を吉川弘文館から出された。最初の著書を出した。わたし、出てすぐ買ったおぼえがある。「文書館学」という言葉が新鮮だったという記憶がある。

安澤 ありがとうございます。

水谷 「もんじょかんがく」と言ってた、これは？

安澤 これはたぶんはじめてのことだと思います。「図書館学」を想定して、図書館学、博物館学、3本柱。ヨーロッパでは、その3つは、並んで並立してあるわけでしょ。日本でそれがないから、それをやらなければいけない。というのは、イギリスにいたときに、もうアーカイブズの存在がわかって、それなりにちょっと勉強していたんです。それをThirskさんという人が、イギリスの歴史遺跡保存委員会⁹³のメンバーだったことがあるのね。また皇太子の先生、Mathias⁹⁴さん、オックスフォードの経済史の先生が、あとになってわかったんですが、この人がビジネスアーカイブズ、Council of Business Archives⁹⁵の会長⁹⁶をつとめるんです。それは長いことトワイニング・紅茶のあの一族がやってた、また最近、Twinningが会長になりましたけど、10年以上、Mathiasがビジネスアーカイブズの会長をやってた。そんなことで、オックスフォードの先生はふたりとも、マニユスクリプトとか、あるいはアーカイブズとかに関係していた人たちですね。

田窪 日本史の先生が、何をきっかけで、イギリスに、いつ頃いかれたのですか？

安澤 桃山でね、在外研修の制度ができたときに最初に名乗りをあげただけで、日本経済史の先生が外国行ってどうするんだ、ということでダメ出されちゃったんですよ。何年か待って、やっ
と行くことになった。

⁹² 酒田では町の郷土史家の所有する史料を読んだ、とのこと。大学院に入った後、本間真子(マサコ)さんに連絡して本間家文書を見に参りました。昭和29年のその頃、生憎、山形大学工藤教授の調査が入っていて、競合するわけに行かず、諦めました。＜安澤＞ 工藤定雄(1912-)

⁹³ Royal Commission on Historical Monuments of England 1999年、English Heritage に統合
<http://www.english-heritage.org.uk/>

⁹⁴ Peter Mathias (1928~) Fellow, All Souls College, Oxford (1968年~1987年)

Master, Downing College, Cambridge (1987年~1995年) 国際経済史学会副会長、会長 企業資料協会 (Council of Business Archives) 議長、副会長、会長などを歴任。国際経済史学会名誉会長

⁹⁵ Council of Business Archives <http://www.businessarchivescouncil.org.uk>

⁹⁶ Council of Business Archives の会長交代については、渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター「BA通信」12号参照 <http://www.shibusawa.or.jp/center/ba/bn/20081225.html>

田窪 最初は桃山でいかれて、そのあと国文学研究資料館のときにもいかれた。

安澤 Mathias と Thirsk がいたオックスフォードに行けた、というのが、アーカイブズへの開眼の本当のきっかけですね。その頃はまだイギリスでもアーカイブズの本は、Jenkinson の本しかなかった。米国では Modern Archives⁹⁷という、Schellenberg ですね。オランダやドイツだともっと早い時期に出てるんですね。イタリアでも出てるし、いろんな本が出ているんですね。

オランダ、ドイツ、フランス、イギリス、イタリア、それぞれにアーカイブズの基本的な著作物が出版されていて、第二次世界大戦直前に国際機関構想が持ち上がっていたんです。第二次世界大戦が始まっちゃったもんだから、ご破算になって。第1次世界大戦後と大恐慌のときに、いろんなところで政府が崩壊する、企業が倒産する、ということで、それぞれの国家や企業がもっていた史料をどう保存していったらいいのか、という課題が緊急の必要として出てきた。それが世界的傾向としてあったと思うんです。日本だけがそれから目をそむけてたんですね。日本は同じような恐慌にあっけいながら、むしろ戦争をはじめることで危機を打開しようとしてた、という話になっちゃいます。

水谷 先生が1985年に『史料館・文書館学への道』⁹⁸を一冊の本として書いて出そうと思ったきっかけは何ですか？

安澤 史料館に戻ってからすぐ書いた論文は、いわば、史料学・文書館学的方法をとって、それに即して書いた論文だったんです。それは「徳島藩裁許所公事落着帳・裁許御目付控帳の基礎的研究」⁹⁹という論文ですね。これはぼくにとって文書館学にかかわる最初の論文なんですが、安藤さん、大藤さん¹⁰⁰ぐらいしか、そう思ってくれる人がいなかった。

(補記 - 「昭和53年7月館内研究会報告、史料館研究業務についての安澤私案」、ぼくが移った時、当時助手だった人たちが史料館の研究業務とは何なのですか、という疑問の声をあげていました。前からいた人たちは何も語ろうとしないので、大学紛争の経験を思い起こし、自分自身にも納得できるようにと、つぎのような要旨の研究目標をあげてみました。＜1、史料所在情報論 2、史料形態・形質論 3、文型様式論 4、発生論的系統論 5、行政管理組織とその連関にもとづく史料構造＝機能論 6、目録・索引・年表作成を扱う史料管理論 7、史料の物理的保管環境論 8、コンピュータ利用による情報検索および情報サービス論 9、比較古代中世近代史料論、10 追加、史料評価論＞ 未熟ではありますが、アーカイブズ学的アプローチの芽生えを表明してみた。若い人たちはほぼ同意してくれましたが、前からいた人たちの中には、断固としてコンピュータ拒否という声もありました。安澤 秀一「徳島藩裁許所公事落着帳・裁許御目付控帳の基礎的研究」『史料館研究紀要』11号86頁、昭和54 参照)

⁹⁷ Theodore R. Schellenberg, *Modern Archives: Principles and Techniques* (1956)

註22参照

⁹⁸ 安澤秀一『史料館・文書館学への道』吉川弘文館 1985

⁹⁹ 安澤秀一「徳島藩裁許所公事落着帳・裁許御目付控帳の基礎的研究」『史料館研究紀要』第11号 1979.3

¹⁰⁰ 安藤正人(1951~)1977.4~2008.3 在職 現・学習院大学教授、大藤修(1948~)1975.10~1993.3 在職 現・東北大学教授

毛塚 日本史で、中世までは古文書学があったけれど、近世史では、まだ古文書学的なものはない時代ですよね。『概説古文書学』で初めて近世編¹⁰¹が出て、資料の整理の柱と、ヤカタのほうのアーカイブズ学と、両方の意味をこめて「文書館学」がこの時期使われはじめたのかなと思うことと、安澤先生のご著書の中で、国際会議に参加されて、ヨーロッパだけでなく、ブラックアフリカも含めて紹介されている視点も、あの視点はたぶん、今でも補充されていないのかなと思うのですが、ICAの国際大会に最初に参加されたのは、この時期なんですか？

安澤 史料館に戻って2年目です。戻った最初の年もイギリスに行ってるんですよ。それは、文書館学の本が出ているのがわかっていましたので、史料館に戻ったからには、あれを手に入れなければと、日本にいては買うのは難しかったので、イギリスで本屋に行けばあるのがわかっていいたから、それで史料館に戻った最初の年に、たまたま国際経済史学会に参加するというので、ロンドンでディロンズ¹⁰²という大きな本屋を探し回って、Schellenbergとか、あと4、5冊買って帰ってきて、それを急いで読んで、さっき申上げた裁許所の論文の中で、文書館学の本の引用をはじめてやったんです。論文の草稿を数年前に書いたときには、文書館学の存在を知らなかったんだけど、本を読んでから、これは引用できると気づいて、はじめのところか、おしまいのところか忘れたけれど、書き加えて、体裁整えたんです。ぼくにとって、文書館学を意識して発表した最初の論文なんですよ。それ以来、そのあとは史料館の紀要・館報¹⁰³に、いくつか国際会議に出た話や論文を書きまくったわけですよ。それをまとめて本にしないか、と安藤さんたちがすすめてくれたんです。その翌年には安藤さんと大藤さんたちが本を出して、そっちのほうはずっと大きな影響をあたえましたね。

水谷 早すぎたんですか。

安澤 早すぎたというより、大藤さん・安藤さんたちは本格的にアーカイブズ学を適用して整理をやり、目録を仕上げた。そして自分たちが適用した考え方と成果を明示する本にした¹⁰⁴。それは適用した成果のほうの方が分かりやすいし、受容れやすいですよ。ぼくの本はバックグラウンドを解説し、世界の大勢を紹介しただけですから。

毛塚 そのころは、もう近世史料取扱講習会の中で先生のお役目をなさってたわけですか？

安澤 それはやってましたけど、ただ、講習会の水準ではダメだと思うようになって。最初は文書館学研修会という名称で科目構成を考えました。予算が付くようになったきっかけは、史料館館報¹⁰⁵に書いた報告の中で、ユネスコから金をもらって国際会議に行った、と書いちゃったん

¹⁰¹ 日本歴史学会編『概説古文書学近世編』吉川弘文館 1989、日本歴史学会編『概説古文書学近世編古代・中世編』吉川弘文館 1983

¹⁰² Dillons Booksellers http://en.wikipedia.org/wiki/Dillons_Booksellers

¹⁰³ 史料館紀要・館報一覧 http://history.nijl.ac.jp/bulletin/btnw_itm.htm

¹⁰⁴ 大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』吉川弘文館 1986

¹⁰⁵ 安澤秀一「第一〇回史料館国際会議ボン一九八四と研修セミナー」『史料館報』42号 1985.3

です。これはボンであった国際大会なんですが、その時にユネスコがぼくの費用を負担するから参加しろと、それで行った。その報告を文部省の役人がみて、本省に呼びつけられ、叱られました。日本の国立の研究所の教授ともあろう者が、貧乏国を援助するためのユネスコから金をもらうのは、どういうことか、と。ユネスコ国内委員会があるのは文部省ですから。それで、そうおっしゃるけれど、史料館には海外研修の予算を一銭も出してない。それがわかったから、ユネスコのほうからお金をくれたんだ、と言ったら、史料館には海外研修の予算がついてないのか、っていうわけで、次の年から海外研修予算がつくようになった。それで安藤さんなどが行けるようになったんです。また外国の例から見て、史料取扱い講習会よりももっと高度なアーキビスト養成が必要だ、ともいったんです。それが研修会予算のつくきっかけになったように思います。

水谷 叱られた甲斐があった。

安澤 国文研の方は国内で海外から人集めて研究集会やってたでしょ。こっちから出ていくことはないわけです。そういうわけで、史料館に海外研修費用と研修会予算がつくようになった。これは有難かったです。

毛塚 そのお金が ICA の使節の招聘などに使われたのでしょうか？

安澤 招聘のための金、それはないです。ユネスコの資金をつかえるように世話してくれたのは、Evans さんというアメリカ人で、ユネスコ PGI¹⁰⁶の特別研究官だった人です。その人が 10 年間、ユネスコ PGI の担当者だった間に、それ以前からも印刷されていたんだけど、ランプスタディ¹⁰⁷というシリーズがね、質的によくなったんですよ。

水谷 ランプ・スタディー？

安澤 RAMP

毛塚 雑誌ですか？

安澤 あれは研究報告書、単行本です、A4 版で。ぼくが史料館を退職する時、全部コピーを作ってもらいました。あのシリーズはね、貴重なんですよ。国会図書館にも 4 ~ 5 冊しか入っていない。国立公文書館にはたぶん 1 冊も入っていないはずですよ。あれは欲しいと言わないとくれないんです。(いまは入っている、と聞いています。)

ぼくが最初に Evans さん¹⁰⁸に会ったのは、ロンドン。つまり史料館に入って 2 年目にロンド

¹⁰⁶ PGI = the General Information Programme (*Programme général d'information* -PGI)

¹⁰⁷ UNESCO RAMP Studies

http://portal.unesco.org/ci/en/ev.php-URL_ID=4984&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html

¹⁰⁸ Frank B. Evans

1983 年 フランク・エヴァンズ氏の来日

ンで ICA の大会があった時。このときも自費で行った¹⁰⁹のかな、ともかく参加して、Evans さんや Roper さんに会った。Evans さんの PGI での同僚でパリーにいる松本慎二¹¹⁰という元国会図書館からの出向者が、実は又従弟なのですが、彼が紹介してくれて。それでロンドンで Evans さんに会ったとき、日本でアーカイブズの研究を始め出したところだ、と言ったら、それじゃこれが必要だろうと、ランプスタディ・シリーズを送ってくれることになったのです。

最初にどどっときて、そのあと毎年、シリーズですから、出るたびに送ってくれました。最初の頃の 5 - 6 年分はアラブ諸国やアフリカ諸国の施設のない国での調査報告書なんです。あとになると、テキストとして使えるものが出てくる。これはエバンズさんの功績ですよ。

平行して、ユネスコ=ICA からいろんな開発途上国にアーカイブズ・システムをつくる支援として、いろんな国のひとたちが行くわけですね。それが Michael Roper¹¹¹であり、学習院に毎年のように来るオランダの Eric Ketelaar¹¹²、西ドイツの Eckhrt Franz¹¹³、フランスの Bruno Delmar¹¹⁴、イギリスの Micheal Cook¹¹⁵、それはもう優秀な人材がアーカイブズ・システムをつくる援助のために、ヨーロッパ諸国から派遣されています。そしてアフリカ諸国での経験をもとにして、それまでのヨーロッパ中心のアーカイブズ学を、国際的に通用できるアーカイブズ学に再構築していくんですよ。その人たちの ICA 理事として活躍する時期と、ぼくの ICA 参加がちょうどうまく一致したんです。

ボンのときに、ぼくが呼ばれたのは一週間のセミナーでした。そのセミナー講師たちが、今いったような人たちです。そこで知り合った開発途上国の人たちがね、みんな日本のような金

ユネスコ総合情報企画部企画専門官(文書館担当)、ペンシルヴェニア州立文書館長を経て国立公文書館記録管理庁(NARA)に勤務、アメリカン大学アーキビスト養成課程で文書館学を担当。1976年からユネスコに出向していた。

安澤秀一「ユネスコ本部文書館専門官エヴァンズ博士を案内して」『史料館報』39号1983年9月

¹⁰⁹ 安澤秀一「二つの国際会議に参加して」『史料館報』34号1981年3月“個人資格の私費で参加”とある。

¹¹⁰ 松本慎二 プロフィール http://www.cyber-u.ac.jp/faculty/heritage/teacher/matsumoto_shinji.html

¹¹¹ 1986年 マイケル・ローパー氏の来日

ICAの派遣使節として1986年8月に来日。英国PRO副館長、ICA国際標準担当。使節報告書「日本における文書館発展のために」の中で日本に対して12項目の勧告を行う。

¹¹² エリック・ケテラール博士プロフィール(学習院)

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/g-hum/arch/Ketelaar.htm>

¹¹³ Eckhrt Franz

Archives and education: a RAMP study with guidelines や *Einführung in die Archivkunde* また *Das Haus Hessen* などの著作がある。

¹¹⁴ ブルーノ・デルマ(1941-)フランス、エコール・デ・シャルト(国立古文書学校)教授 2007年10月に学習院大学で講演 国連の専門家としてコートジボワール国立公文書館設置やセネガル・ダカール大学アーキビスト養成課程創設支援に尽力。(学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻編『記録を守り記憶を伝える—学習院大学大学院アーカイブズ学専攻記念誌—』東京,学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻,2010)

¹¹⁵ マイケル・クック(1931-)オックスフォード大学で歴史学を修め、Bodleian Libraryのアーカイブ養成課程を経て、いくつかのアーカイブズに勤める。1964年、ザンジバルのスルタン府のアーキビストに指名されるが、革命によって、タンザニアのダルエスサラームのナショナル・アーカイブズの館長を2年間勤める。*The Education and Training of Archivists - Status Report of Archival Training Programmes and Assessment of Manpower Needs* (1979) や *An Introduction to Archival Automation: A RAMP Study* (1982) や *Guidelines for Curriculum Development in Records Management and the Administration of Modern Archives: A RAMP Study* (1986) ほか著書多数。(Margaret Procter and Caroline Williams ed., *Essays in Honour of Michael Cook*, University of Liverpool, 2003)

持ちの国のプロフェッサーが、なんでユネスコから金もらってくるんだ、と言いました。それで、日本はアーカイブズ・システム最貧国なんだ、と弁解しました。

毛塚 日本はユネスコ加盟国で公文書館法ができた一番最後の国でしたよね。

安澤 そうですね。

毛塚 そういう意味では最貧国ですね。

安澤 開発途上国どころの話ではない。いちばん貧しかった。なんにもなかったわけですから。

毛塚 Roper さんに来ていただいて、その頃は、全史料協と同じような動きをしてたわけですよ。

安澤 日本からユネスコを通じて ICA に拠出金をたくさんいただいている、どうやってお返ししたらいいのか、なにか手立てがないか、というエバンズさんからの話をうけて、それならミッションを送ってくれ、と頼みました。それで来たのが Michael Roper さんなんです。中国訪問をかねていたので、香港からの往復の飛行機代と滞在実費だけで来てくれたのです。国際集会開催費用調達のためにわたし一人でいろいろな企業を駆けずり回りました。この話は誰にも言いません。もう時効でしょう。表向きは全史料協を交渉の窓口としていたので、全史料協が直接、派遣を交渉した、と思っているのでしょうか。

毛塚 このころはまだ国立公文書館は全然国際会議には関係なくて¹¹⁶、国立史料館が中心にアーカイブズ学とかをやってた時期ですよ。

安澤 ロンドン大会¹¹⁷には中国が大量に人間を送りこんできました。台湾 1 人、北朝鮮 1 人。韓国は来てない。パリー大会¹¹⁸からぐらいから、韓国が大量に人を送り込んできます。そのあと韓国はアメリカに留学生を送り込み、いそいで教員を養成しはじめます。そういう点では、日本の統治下にあった台湾も、韓国も、図書館学・博物館学はいっしょうけんめいやるけれど、アーカイブズ学はまったく知らない状況だったんですよ。

（補記 - 私がアーカイブズ学の基礎として組織論をあげるのは、アメリカの経営学の本をよんで、情報伝達のメカニズムを学んだことによります。それは国営の郵便局の事例で考察した H.R.Simon の「組織と管理の理論」¹¹⁹でした。なおサイモンの組織論的理解がアーカイブズ理解にとって必要なことをエバンズさんに告げたら、早速本屋に駆けつけ、組織論の本を買い込んだことが印象的でした。また最近アーカイブズ学の議論に、野中郁次郎さんの著作『知識経

¹¹⁶ 国立公文書館は 1972 年に ICA に加盟している。

¹¹⁷ ICA ロンドン大会 1980 年開催

¹¹⁸ ICA パリー大会 1988 年開催

¹¹⁹ H.A.サイモン他著岡本康雄他訳『組織と管理の基礎理論』ダイヤモンド社 1977

Herbert A. Simon, Donald W. Smithburg, Victor A. Thompson *Public Administration*, Alfred A. Knopf, 1950

営論』¹²⁰の影響もみられるようになっている、と思っています。)

水谷 続いてアーカイブズ学を構築していった、94年を迎えるわけですね。駿河台大学、第1回アート・ドキュメンテーション研究フォーラムありますが、文化情報学についてすごくたくさん書かれています、学部設置はたいへんだったと。

安澤 1994年に駿河台大学に情報学関連の学部をつくってくれと言われて。ぼくは1年以上、断っていた。仲にたったのは高山正也¹²¹さんです。国会図書館副館長だった金沢工業大学の酒井悌¹²²さん。彼が亡くなって、ぼくも世話になっていたから、お葬式に出たら、高山さんも来て、そこでまた高山さんにくどかれちゃったんですよ。酒井さんのお葬式で高山さんに会ったのが運のつきでした。酒井さんは文書館学に理解を示してくれてた人だから、安澤さんも手を貸してくださいよ、と言われて、つい引き受けちゃった。死んだ人、持ち出されると、弱いよね。

田窪 高山先生のゼミの学生が、駿河台の経営者の一族だった話、聞いたことあるが、そういうご縁があるのですか。

安澤 山崎壮太さんですね。その方は数年前に亡くなりました。たしか図書館情報センター事務局長でした。

毛塚 当時は、文書館学、史料管理学、のような言葉が主体で、文化情報学という名前をつけること自体、すごく抵抗があったとか。

安澤 MLA連携を別の言い方で表現しようとしたのが文化情報学という名称です。これは水谷さんのおかげなんだけれど、アート・ドキュメンテーションのシンポジウムでぼくに報告させてくれたでしょう。あの頃というか、文書館学はじめたときに、図書館学とか、博物館学とか、既存のものがある。それと性質がちがうんだ。だからまず自立しなきゃいけないと、いわば垣根をつくってみたんですよ。垣根をつくったぼく自身が、やはり共通の場がある、ということ、否応なしに思い知らされているわけですね。それは史料館でも、さっきお見せしたように看板¹²³はいっぱいあって、博物館的な要素あるし、参考図書は図書館ぐらい持っているし。その3つの機能を兼ね備えていなかったら、文化施設として成り立たないだろうと、そんなことをずっとぼく自身は頭の中にもっていた。ただ文書館学はじめたときに、図書館学、博物館学とは違うのだということを、強調せざるをえない立場にいたことはいたんですよ、それによって、文書館学の自立性を際立たさなければいけないという時期があったんですからね。ですから実際自

¹²⁰ 野中郁次郎・竹内弘高著梅本勝博訳『知識創造企業』東洋経済新報社、1996 野中郁次郎著 野中郁次郎『経営管理』日本経済新聞社 1980

¹²¹ 高山正也 現国立公文書館館長

¹²² 酒井悌さん(国会図書館副館長)→金沢工業大学、私は全史料協主催の国際会議開催の寄付金集めをしていた時、酒井さんにいろいろとお世話になりました。また金沢工業大学主催の国際会議で報告するよう酒井さんに依頼されたことがあります。そのことを知っていて、高山さんから誘われたのです。〈安澤〉

¹²³ 日本実業史博物館コレクション <http://base1.nijl.ac.jp/~jituhaku/> (6)器物

分がね、そういう関連学部を、というか、むしろ情報学を共通基盤にするような MLA 連携をやるべきだというふうに思っていたことは思っていた。

(補記 - 昭和 53 年以来、アーカイブズ学関連英語文献の収集を始めた際、博物館学関連英語文献も収集対象とした。そのなかに Davud Bearman 主宰¹²⁴の Archives & Museum Informatics: Technical Report というシリーズがあった。ベアマンは Electronic Evidence 1944 その他、多数の著書・論文を持つ論客であった。スミソニアン研究所勤務という経歴を持つベアマンは博物館業務とコンピュータ利用に関する著作とともに、多くの国際会議も主宰した。はじめコンサルト事務所をピッツバーグにおいたが、今はカナダ・トロントにいる。MLA 連携の先覚者であり、Archives & Museum Informatics というシリーズ刊行物は必読の文献といえる。入手した初期のシリーズに欠けているナンバーがあったので、日本の博物館関係者にリストを送って欠番印刷物の有無をたずねた。一通だけ返事があり、当館(科学技術館)所蔵分より安澤所蔵分のほうが多い、とありました。回答者は水嶋英治さんでした。その後いくつもの会合でお目にかかるようになり、来日したベアマンの講演に出席し、紹介されました。またかねて読んでいた E.Orna の著作『博物館情報学入門』勉誠出版 2003 を水嶋さんが翻訳され、その監修者となるよう依頼され、名を連ねる、という嬉しいことが起きました。オルナさん来日の折にはその講演会でコメントすることにもなりました。

あるいは会員の黒田結花さんのご好意で、ICA 建築部会編『建築記録アーカイブズ管理入門』書肆ノアール 2006 の翻訳を上梓し、解題として「電子記録管理入門」を収録し、アーカイブズ学における EAD メタデータ検討の現況を紹介できた。私なりに MLA 連携の基盤である情報学的アプローチへの関心を実践しているつもりでいます。

と同時に文字使用社会と無文字社会とを対比することで、人間行為としての情報継承・情報伝達の手法の違いを探求してきました。その一例としてエスター・ボズラップの『農業成長の諸条件』(再版の際、改題して『人口圧と農業』)ミネルヴァ書房の翻訳が挙げておきます。オックスフォードでの在外研修の成果でもあります。そしてこの書物に引用されているトロント大学 Richard Lee 教授のいくつもの論文を捜し求めて読みました。のちに大冊『!Kun San, Men, Women, and Work in Forage Society』Cambridge Univ. Press 1979 を入手し、カラハリ砂漠で遊歴するブッシュマン・!KUN 族の記憶継承・伝達の社会システムをいまも読み返しては、文字使用社会との比較を探求しております。)

だから、高山さんに誘われたというだけではなく、ぼくの中で、それをどこかでやるところがないかなと常に考えていたのが、高山さんに誘われて、おれにもチャンスがあるのかなと、ちょっと自惚れたところがあって、これは失敗のもとですね。それはね、ぼくのしたいこと¹²⁵が残っていたんですが、それを、あの駿河台大学に関係していた 8 年間、全くやれなかった。やれないどころか、ある意味、ぼくが経済史研究をやめて、よけいなことばかりしていると見られたし。文書館学からも離れたんじゃないか、とも思われたりしたんですね。

(補記 - 大垣藩関連の研究論文目次

¹²⁴ 1986 年 David Bearman と Jennifer Trant によって Archives & Museum Informatics, 活動開始 <http://www.archimuse.com/> David Bearman らスミソニアンのスタッフなどを中心として ICHIM (International Cultural Heritage Informatics Meeting) が米国のペンシルバニア州ピッツバーグで開催, その後定期的開催。また Museums and the Web の活動が盛ん。

¹²⁵ 大垣藩を対象とした一連の研究をまとめたいと思っていたこと。

1. 「美濃国大垣藩藩法典定帳成立考」法学研究 33-9 昭和 35、藩統治の基本理念と、その実現のための方策を体系化し、「法」として明文化したのが定帳である。この論文が慶応大学法学部の学会誌に掲載されるについては当時の法学部法制史担当手塚豊¹²⁶教授が昭和 33 年社経史大会での報告を聞かれ、つよく投稿をすすめていただいたことにある。
2. 「美濃国大垣藩の財務機構 上下」地方史研究 10-2、10-4 昭和 35
3. 「大垣藩美濃国本巢郡神海村の戸口」三田学会誌 53-10・11 昭和 35
4. 「近世前期における百姓夫役と家中普請役」三田学会誌 62-10・11 昭和 44
5. 「藩財政の経済的性格」『新しい江戸時代史像を求めて』有斐閣所収 昭和 52
6. 「松江藩出入捷覧と明治三年藩歳入歳出比較」『松平不昧と茶の湯』同刊行会所収平成 14
7. 「藩財政」『近世藩制・藩校大辞典』所収、吉川弘文館（国史大辞典原稿を修正）平成 18 付録：翻刻「定帳」全文）

田窪 駿河台大学では学生全員にコンピュータを持たせましたね。ところで（安澤さんの）メディアエータ¹²⁷という概念について、おもしろい話があって、「図書館、情報、研究と教育のためのヨーロッパ協会」¹²⁸というのがあるんですね。そこが、2005 年に、これからの図書館情報学教育についてどう考えるかというレポートを出していて、そこでね、先生ね、司書だけじゃなく、あらゆる情報専門職を対象とする、学芸員とかアーキビストも入れて。そのときには、メディアエータという立場から抽象化すれば扱える、と言ってるんですよ。先生がおっしゃっていたことは、2005 年のヨーロッパ図書館情報学の報告書「これからの情報学教育の報告」の中に出てくるので、おもしろいなと読んでたんですね。

安澤 まさにそれを考えていたんですよ。それがあって駿河台大学のポストをひきうけちゃったんです。

若月 高山先生はそのときは、まだ慶應にいらっしゃったんですか？

安澤 高山さんと意識しておめにかかったのはたぶん金沢工業大学ですね。そこで国際セミナーをやってたんですよ、10 年ぐらい続けてたかな。ぼくがアーカイブズとは何か、の話をする事になって。そのときに、高山さんから声をかけられたのが知りあう最初だったんじゃないかと思うんです、今ふりかえてみると。

水谷 そのとき竺覚暁先生にもお会いになった。

¹²⁶ 手塚豊（1911-1990）慶應義塾大学教授

¹²⁷ Mediator 駿河台大文化情報学部設置の際、人材養成の目標として「メディアエーター」という言葉を日本で最初に使ったことを、田窪さんは覚えていてくれました。当時の募集要項や学部の性格の説明の際に使用しています。文化情報を必要とする社会と、存在する文化情報の所在とを仲介する専門職、つまり MLA にかかわる専門職という意味合いです。＜安澤＞駿河台大学大学院現代情報文化研究科文化情報学専攻のパンフレットには「・・・情報資源の管理や運営を行う専門的知識や技能を持つ人材を情報メディアエータと定義・・・」とある。

¹²⁸ European Association for Library & Information Education and Research (EUCLID)
<http://euclid-lis.eu>

安澤 その時、竺覚暁先生にも、その国際セミナーではじめてお目にかかりました。

毛塚 記録管理学会ではないんですか、高山先生と出会ったのは

安澤 記録管理学会よりもずっと前のことですね。

水谷 駿河台大学¹²⁹で文化情報学部を立ち上げるとき、文部省の反応はどうでしたか？

安澤 文部省の設置申請の窓口の反応は、「そんなもの、つくりたくない」というのが最初の反応。難航しました。

とどめをさしたのは、ぼくは史料館というところにおいて、アーカイブズ学をさんざんやってきた。そこでいろいろな報告書や進言みたいなことをやって、それを（文部省の）学術課が受け入れてくれたのに、なんで大学設置の事務局がそういうこと、あったことないような顔をしているのですか、と唸ったことがある。これが効いた、とぼくは思っている。一緒にきていた、駿河台の事務の、今もいるけど、増田一樹さんが心配して、先生あんなこと言って大丈夫ですか、と心配していました。あの申請の窓口の事務官が認可の方向に転じたのは、あのひとことだと思うんですよ。

毛塚 94年はまだインターネットが普及する前に、そのときに入学者にノートパソコンを全員に配布するような発想そのものの自体を理解させることがかなり大変だったと思うのですが。

安澤 そうですね。

水谷 先生は、やっぱりコンピュータは早かったんですね。どの段階で？

安澤 国文研にいたときからです。あそこは大型計算機を導入していること知っていて、それが利用できると思って、移ったんですね。数量経済史研究会にぼくは参加しなかったけれど、実際にはふたまたかけていて。史料の整理、目録づくりということが、本命なんだけど、数量経済史的な研究も、実はやっていたわけです。駿河台大学に移ってからの仕事になりますが、共訳『コンピュータで歴史を読む』¹³⁰がそれなんです。神立孝一さん、児島秀樹さん、田良島哲さん、南部宣行さん、広瀬順皓さん、村越一哲さんとの共訳です。

若月 1995年ですと、Windowsは3.1が出ていた。MS-DOSもあったが、Macはそのころ全盛で、知る人は知っていたんで、たぶん全くというよりは未来予想できれば、やっぱり先進的なところができたのかなと。よくやったなと思うところもあると思うのですけれど。

¹²⁹ 駿河台大学文化情報学部設置は1991年 <http://www.surugadai.ac.jp/about/gaiyo/enkaku.html>

¹³⁰ イーヴァン・モーズリー、トーマス・ムンク著安澤秀一他共訳『コンピュータで歴史を読む』有斐閣 1997
神立孝一（創価大学教授）、児島秀樹（明星大学経済学部教授）、田良島哲（文化庁 東京国立博物館）、南部宣行（早稲田大学政経学部教授）、広瀬順皓（駿河台大学メディア情報学部教授）、村越一哲（駿河台大学メディア情報学部教授）

安澤 それは文部省の設置申請の窓口としては、前例のない学部だということで、かなり拒否の姿勢だったんですよ。

若月 SFC・慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス¹³¹では、みんなが全員パソコン持ってた。SFCはそのころもうやっていた。

安澤 ぼく自身はね、史料館に移ったきっかけは、大型計算機が使えるだろうと思って行ったわけですよ。行ったら、館長に「大型計算機使わせてください」と言ったら、史料館はあれは使わないと拒絶したじゃないか、と頭から叱られて。

水谷 そんな感じだったのですか。いつですか？

安澤 それでしょうがないので、次の年（1979）にですね、国文研のえらいさんに無断で、その時にいた田嶋一夫¹³²さんに頼み込み、その他、今は図書館情報大学や、国立情報学研究所に移っていきましたけれど、その人たちがいる時に密かに出入りして、いろいろ情報をあげたり、もらったりして、彼らにぼくが作っていたデータベースのデータを提供し、これでグラフを書いてくれませんか、と頼んだら、「いや、こういう仕事は国文研ではやらせてもらえないんだ」とすっかり喜んじゃって、ぜひやらせてくれと。（笑）あれは本当に楽しかったですね。安永尚志¹³³さんの前の時代です。勿論安永さんともなかよくなりました。科研費もらったときも知恵をかしてもらいました。

毛塚 史料館のあった5階とそれ以外のフロアとはいろいろありましたものね。

安澤 ぼくはそこの人たちとはうまくいくようになっていた。ただし史料館の人たちには知らん顔をしてましたけど。

だけど、2年ぐらいたって、ぼくが、財政史料の分析（『国史大辞典』の「藩財政」原稿）終えて発表したあと、史料館の危機存亡、さっきの行政管理庁の勧告があって、どんどん予算が減っていく。コンピュータを導入しなかったら、本当につぶれるよ、目前だよ、と。きみたちの研究費がひとり年間10万ずつある、今、教官が10人いる。10人が拠出すれば100万だ。この100万を会計に持って行って、これでコンピュータを導入してくれと交渉したいと思う、と説得したら、みんな最終的には出しましたよ。

で、その100万もって会計に行って、これだけみんなが自分たちの研究費を返上してでもコンピュータを入れたいと願っている、と交渉しました。「先生がそこまで言うのでしたら、我々のほうでお金は何とかします」と言ってくれました。それで10万ずつ、みんなに返しました。

その時にね、パソコン2台、プラスいろんな周辺機器まで、全くついてないお金でね、こっ

¹³¹ 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス 1990年開設 <http://www.sfc.keio.ac.jp/top.html>

¹³² 田嶋一夫 国文学研究資料館に1972.5-1988.3（退職時は文献資料部助教授）在籍。現在はいわき明星大学教授 http://www.iwakimu.ac.jp/department/staff/tajima_kazuo.html

¹³³ 安永尚志 1983～国文学研究資料館研究情報部在職 現名誉教授

ちが願っていたもの以上のものを買ってくれました。そして、事務官だった山田哲好さん¹³⁴をひきこんで、保証はできないが、パソコンやれば、何とかなるからと説得しました。

毛塚 史料所在情報データベースの研究をはじめたところですか？

安澤 それで科研費がつくようになったんです。1980年代の後半かな？パソコンを導入してから数年はまだ在職してたと思う。最初の研究成果報告書¹³⁵の2年分ぐらいはぼくの名前で報告書、出てますよね。史料館勤務の最後のころです。

田窪 やっと20MのHDDが出てきた頃ですか。

安澤 そう。実は多摩市史¹³⁶と関係していて、そこでもコンピュータを導入するために2年、3年ぐらいかけて交渉し、導入して目録の作成や、データの入力だとか、いろんなことに使ったんです。導入したら途端に、今まで声も挙げなかった古代・中世の人たちが集まってきて利用しました。最初は近世だけでコンピュータと言っていたので、1台あればいいと思っていたら、予想もしてなかったけど、1台では足りなくなりました。次の年また1台いれましたけどね。そのコンピュータの整備は、五嶋さん¹³⁷がね、だいぶやってくれたんですよ。最初は、神立孝一さんという創価大学の先生¹³⁸ですけどね。

中村 先生は大きな革命をおこされたんですね。だって制度的にそこでコンピュータの導入がなければ、遅れたでしょうね、いろんな面で。職場として、研究する場として、今の時代、どんどん情報化を考えるたら、それは大変な革命をおこした重要な時期だったんですね。

安澤 そのときの国文研のコンピュータ（活用）の姿勢もね、国文の人たちが主導ですからね。ぼくから見たら活用しているように見えなかったです。

毛塚 コンピュータの導入といっても、史料館は、あくまでも大型計算機ではなくて、パソコンなんですよね。全く別で、独自にやってるんですよ。

安澤 その時に、MARC-AMC¹³⁹で、目録づくりをしようとしたんですよ。神戸商科大学¹⁴⁰の澤村正信教授の指導するコンピュータ研究室の人たちを動員してね。その人たちを動員するのに、そ

¹³⁴ 山田哲好 国文学研究資料館准教授 1975.7～在職

¹³⁵ 科学研究費補助金 総合研究(A)『近世・近代史料所在情報の収集及びその体系化に関する基礎的研究』(昭和60～62年度 1,750万円)

同『史料所在情報の蓄積検索システムに関する研究』(昭和63年度～平成元年度 1,490万円)

¹³⁶ 多摩市史編集委員会『多摩市史資料編2近世経済』多摩市 1995 編集委員会委員

¹³⁷ 五嶋敏芳 京都大学研究資源アーカイブデジタルコレクションアーキビスト

http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/modules/about_staff/

¹³⁸ 神立孝一 創価大学経済学部教授 <http://keizai.soka.ac.jp/557.html>

¹³⁹ MARC-AMC MARC Format for Archival and Manuscripts Control

¹⁴⁰ 現兵庫県立大学 <http://www.u-hyogo.ac.jp/annai/history/index.html>

の前年に退官した学長がぼくの仲良しだった、経済史の仲間だったので、その名前を出して、こういう先生と長いこと一緒に研究してきたんだ、彼もコンピュータやるということなら援助してくれるにちがいがなかった、と無理矢理に引っ張り込んだんです。

田窪 そうだったのですか。情報知識学会の大会があったときに、神戸商科大学の先生が発表しにきて、安澤先生と知り合いだ、と言った人がいました。周防節雄さん¹⁴¹。

安澤 そう、周防さん。それに大久保恒治¹⁴²さん。その人たちに、MARC-AMC の日本語適応をやってくれたんだけど、実際にはうまくいかなかった。というのは、MARC-AMC そのものが単層構造、マルチレベルではないのですよ、目録づくりには向いていなかった。

最初から MARC というのは、図書館用の 1 階層でしょ。それを AMC という、アーカイブズ適応にしたんだけど、いざコンピュータでやろうとすると、複数階層にするのが非常に難かかった。しかも英語で書かれている MARC を日本語でやろうとなると、もっと難かしいわけ。それで断念しちゃったんです。

だけど、ぼくとしては、MARC-AMC はうまくいかなかったけど、次は何かというと、メタデータなんです。メタデータっていうのは、ぼくにとって最終到達点なんです。ちょっとメモを書いてきたんだけど、ドキュメンテーションということは、要するに、事物の状態を記述するという。事物の状態を記述するためには、そこで書類というものが作られる。カタログだろうとなんだらうと、文字で書き込む。文字で書きこむ、つまり、自然言語で書きこむ。自然言語で書き込んだものを、文字数が多いから、そこから検索手段を抽象化していかなければならない。それを抽象化する間に、コンピュータを導入することによって、プログラム言語が必要になる。この 3 本だてですよ。

言語としては、自然言語とコンピュータプログラム言語とマークアップ言語。

マークアップ言語の最初が MARC¹⁴³。非常に初歩的であっても、アメリカの議会図書館が開発した MARC は、アメリカのみならず、ヨーロッパ諸国でも普及したわけです。

自然言語は記述に使われると、必ず専門用語を使わなければならない。専門用語は、論文でも、要約をつけて、その下にキーワードを書き込むということをやってますよね。プログラム言語はさておいて、マークアップ言語というのが普及しています。アーカイブズの世界では、必ずしも MARC-AMC が実用化されていないわけではありません。アメリカではずいぶん普及しているんですが、やはりそれだけではやれないということで、EAD (Encoded Archival Description) ¹⁴⁴を開発する。

その EAD は、XML (Extensible Markup Language) の延長上というか、XML を適用して EAD を記述する、ということが行われています。その EAD であれ、ほかの自然言語であれ、マークアップ言語を使う場合にはメタデータを付与しなければならない。そのメタデータ要素

¹⁴¹ 周防節雄 (1947 ~) 兵庫県立大学神戸学園都市学術情報館教授

¹⁴² 大久保恒治 駿河台大学メディア情報学部教授

http://www.surugadai.ac.jp/gakubu_in/media/kyoin/t_okubo.html

¹⁴³ 米国議会図書館 MACHINE-Readable Cataloging <http://www.loc.gov/marc/>

¹⁴⁴ 米国議会図書館 <http://www.loc.gov/ead/> 全米アーキビスト協会 EAD ヘルプページ

<http://www.archivists.org/saagroups/ead/> 参照

を、マークアップ言語、それは XML であろうと、SGML (Standard Generalized Markup Language) であろうと、そこに埋め込むということがおこなわれなければなりません。

そのメタデータ要素を埋め込むことによって、複合的な分野、あるいは複数分野、どちらでもいいんですけど、の横断検索が可能になる。だから、図書館であろうと、博物館であろうと、アーカイブズであろうと、メタデータが重要になってくる。

今までさんざん言い古されていることでなんですが、それによって各分野の横断検索が、これまで以上に可能性が高くなってきた、というふうにいえると思うんです。それは手書きものでであろうと、印刷物であろうと、そこに書類、自然言語で書かれた記述があれば、メタデータを通じて、横断検索は可能になっていく。そういう可能性をメタデータはもっているし、それぞれ各分野で特有のメタデータを見つけていかなきゃならないし、それを埋め込んでいく作業が必要になるだろう。

そういうことをこの数年来、10 年来といったらちょっとオーバーだけど、アート・ドキュメンテーションの会長就任の最初のときの話のなかでも、ぼくはメタデータが重要だと思うことを、みなさんに申し上げたと思うのですが、それがいまだに続いていると。

ぼくのそういう考え方を引き継いでくれて、横断検索に役立ってくれているのは、今京都大学に移った五島敏芳さん。京都大学の博物館に去年か、おととしくらいから移って、一所懸命、京都大学中心に EAD の普及につとめてる。この人が、あんまりにも EAD に夢中になってしまった所為でしょうか、歴史研究の世界からも、アーカイブズの世界からもすっかり疎んじられてるような形になっているように思えてなりません。

学習院は、本当にアーカイブズ学をきちんとやろうとするなら、メタデータをきちんと教えられる人と呼ぶべきだと思うのだけれど。これは苦言です。ぼくとしては将来を考えたときに、世界的に通用するようなアーカイブズ学の根拠地として学習院がそれになってもらいたいと思うものだから、こういうことをつい言うってしまうのです。

これは学習院に限らないですよ、日本の図書館、博物館、文書館、あらゆる分野で、EAD をせっかく日本語で利用できるような道具をつくってくれて、無料の普及に今一所懸命、京都大学の中でがんばっているのだけれど、ただねえ、彼も博物館の下では、居心地悪そうですよ。

田窪 2月に会いましたが、ひしひしと、京大ってちょっとしんどいところあるよ、って感じがして。

安澤 メタデータにおよんだところで、話の締めくくりにさせてください。振り返ってみると、若い頃、野村先生に「おまえは八宗兼学(宗派の枠を超えて学ぶこと)を目指しているのか」と励まされたことを、あらためてかみしめて感謝しています。またアート・ドキュメンテーション学会に参加し、会長職についたときが仙台での大会¹⁴⁵であり、辞任しときの大会が熊本でした。

¹⁴⁵ 仙台大会 2001 年 「仙台藩明治三年北海道移住士族并旧家来の人口分析 - 熊本藩明治三年第八区士族卒戸籍人口指標との比較」 立命館大学高木正朗教授との連名、社会経済史学会第 78 回大会報告、東洋大学、2009-09-26 同上資料集、250 頁印刷配布

熊本大会 2003 年 「熊本県立図書館所蔵資料、『熊本藩明治 3 年庚午戸籍』『庚午以降戸婚』『戸籍辞令・諸藩明治 2 年藩治職制』デジタル画像アーカイブ/データベース」CD-ROM 3 枚組、2003-09

熊本大学附属図書館寄託永青文庫「熊本町方諸品調帳他八点」デジタル画像、DVD 収録 5 GB 2004-09

何れの地でも得がたい史料にめぐりあえ、データベースを作成できました。運をもたらしてくれたアート・ドキュメンテーション学会に心から感謝します。

水谷 では、みんなで写真を撮りましょう。

= 終 =

-
- 「熊本町方諸品値段調帳（天保10年5月～明治3年5月）DB化の基礎作業：熊本大学附属図書館寄託永青文庫史料による」社会経済史学会第74回全国大会一橋大学、報告要旨集および配布資料、2005-04
- 「熊本県第八区明治3年庚午戸籍士族・卒・平民・長屋借人口DB化の基礎作業」社会経済史学会関東部会報告 早稲田大学 2005-12
- 「熊本県医師家塾調明治6年における医療教育と使用教科書（35事例）」情報知識学会誌 16-2（第14回年次大会研究報告） 2006-05
- 「明治3年熊本藩第八区庚午戸籍による士族卒族人口データ分析」社会経済史学会第75回大会自由論題報告要旨集および配布資料 同志社大学 2006-09

後列左から：
筒井、中村、田良島、水谷、若月、
田窪
前列左から：
毛塚、梁瀬、住広、安澤先生



後列左から：
毛塚、田良島、水谷、若月、田窪
前列左から：
筒井、中村、住広、梁瀬、安澤先
生、富澤





書庫にて



イギリスの古記録
パーチメント

